

「ADC 時代」の到来 —チソツマブ ベドチン，そしてその先へ

企画者のことば

松村謙臣

がん治療の世界は、今まさに大きな変革のときを迎えています。これまでの化学療法や分子標的治療に続く新たな柱として、抗体薬物複合体(antibody drug conjugate；ADC)が注目を集めています。ADC は、がん細胞を特異的に認識する抗体に強力な抗がん薬を結合させることで、従来の化学療法よりも選択的にがん細胞を攻撃できる革新的な治療法です。その進化は目覚ましく、近年、婦人科がん領域でも次々と新たな ADC が導入されつつあります。

日本においても最近、子宮頸がんに対するチソツマブ ベドチン(Tisotumab vedotin；TV)が保険承認されました。また、卵巣がんに対するミルベツキシマブ ソラブタンシン(Mirvetuximab soravtansine；MIRV)はすでに米国食品医薬品局(FDA)で承認されており、日本でも承認に向けた臨床試験が進行中です。さらに、乳がんや消化器がんでは劇的な効果を示し、国内外で薬事承認を受けているトラスツズマブ デルクステカン(Trastuzumab deruxtecan；T-DXd)は、卵巣がん・子宮体がん・子宮がん肉腫・子宮頸がんにも高い抗腫瘍効果を示し、2026 年春には日本でも保険承認になると予想されます。このように、ADC は、産婦人科医が知っておくべき重要な治療選択肢となりました。しかし、その一方で、眼毒性や肺障害などの特有の有害事象があり、適切な管理や他科との連携が不可欠です。

本特集では、各分野の専門家に寄稿いただき、産婦人科医が知っておくべき ADC の基礎から最新の臨床応用までを、わかりやすく解説しました。本特集を通じて、読者の皆様が ADC に関する最新知識を身につけ、日々の診療に役立てていただければ幸いです。